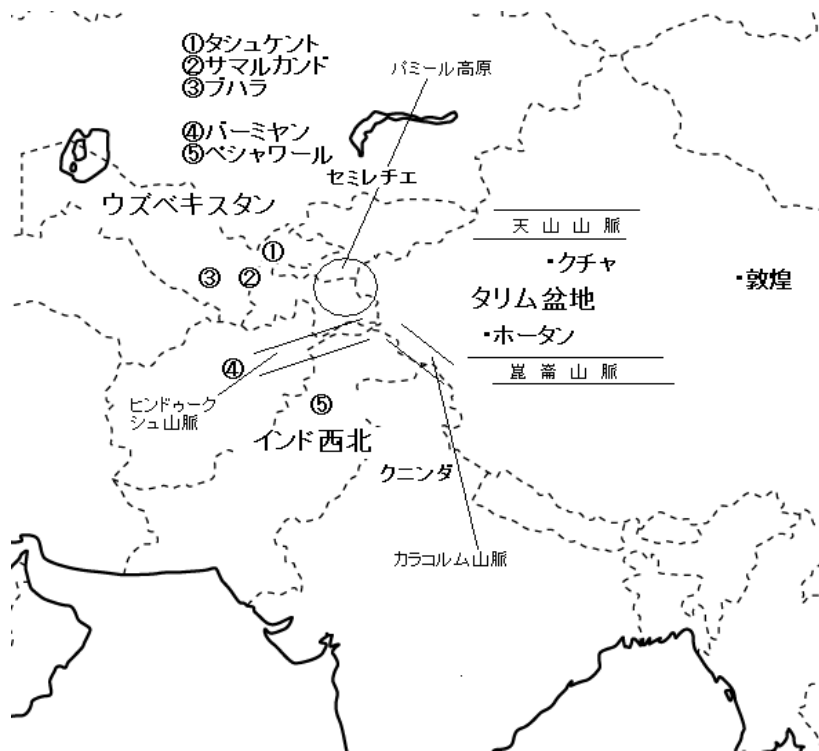


二言語併用貨幣の伝播  
—ギリシア系バクトリア王国からクシャーン朝まで—

吉池孝一

1. バクトリア王国の貨幣銘文

ギリシア系のバクトリア王国は、アレクサンドロス大王(在位、前336-前323)の没後、その東征軍の一部である総督ディオドトスI世(在位、前256-前248)が興した王国であり、現在のウズベキスタン東南部からアフガニスタン最北部一帯に相当する。ここではギリシア文字ギリシア語銘文をもつ貨幣が発行された<sup>1</sup>。



次に紹介する貨幣はディオドトスI世の発行に係る銀貨(古代文字資料館所蔵)である。表は若いディオドトス肖像。裏にはゼウスの立像とその左右にギリシア文字・ギリシア語の銘文がある。銘文については、右に  $ΒΑΣΙΛΕΩΣ$  (basileōs 王の)、左に  $ΔΙΟΔΟΤΟΥ$  (diodotou デイオドトスの)とある。なお、ディオドトスの名を持つ貨幣にはディオドトスの老いた肖像のものと若い肖像のもの二種がある。両者ともにバクトリア王国の創始者ディオドトスI世とする説と、老いた像をディオドトスI世とし、本貨

<sup>1</sup> 本稿のバクトリア諸王の系譜と在位年は前田 1992:146 による。

幣のような若い像を息子のディオドトスⅡ世とする説がある<sup>2</sup>。



表

裏

バクトリア王国のギリシア人諸王のうち、デメトリオス 1 世(在位、前 200-前 185)の時代になるとヒンドークシュ山脈を越えてインドの西北に進出した。これ以降の諸王の貨幣とヒンドークシュ山脈以北にとどまっていたころの諸王の貨幣とは異なる面がある。銘文についていえば、表裏に異なる文字と言語が書かれた貨幣、いわゆる二言語併用貨幣が現れる<sup>3</sup>。そのデメトリオス 1 世には三人の息子がいたらしい。デメトリオス 2 世(在位、前 180-前 165)、アガトクレス(在位、前 180-前 165)、パンタレオン(在位、前 185-前 175)であり、それぞれの王名をもつ二言語併用貨幣が発行された。デメトリオスとするものはギリシア文字とカローシュティー文字によるものであり<sup>4</sup>、アガトクレス、パンタレオンとするものにはギリシア文字とブラーフミー文字によるものがある<sup>5</sup>。もっとも、周辺地域と後代に与えた影響という点では、前者のギリシア文字とカローシュティー文字銘文による二言語併用貨幣の方がはるかに大きい<sup>6</sup>。

その後、インド西北の地においては、ギリシア系バクトリア王国に代わり、幾つかの民族の興亡があったけれども、二言語併用貨幣は発行され続けた。

<sup>2</sup> 前田 1992 参照。

<sup>3</sup> 貨幣の形態と製造法およびデザインにあっても、ギリシア的なものとインド的なものの融合が見られる。この点については吉池 2014 参照。

<sup>4</sup> 前田 1992 参照。“これらのコインはいずれもデメトリオスⅡ世のものと考えられる。そしてこの二言語併用には特別な意味があったと思われる。それはカローシュティー語文化圏とデメトリオスⅡ世との深いかわり合いを示すものにほかならない。デメトリオスがインダス河流域の経営に力をふるったからなのかもしれない。”(161 頁)

<sup>5</sup> 貨幣の見本は、パンタレオンについてはグプタ 2001 の 217 頁 No. 36 及び Mitchiner1975 の p. 84 参照。アガトクレスについてはジョナサン・ウィリアムズ 1998 の 46 頁及び Mitchiner1975 の p. 80 参照。

<sup>6</sup> 吉池 2011 参照。

## 2. インド・ギリク朝絶頂期の二言語併用貨幣

インド・ギリク朝は、デメトリオス 1 世の息子デメトリオス 2 世以降ヒンドゥークシユ山脈以南を統治したギリシア人の王国である。次に紹介する貨幣は、アガトクレスの娘アガトクレイアと結ばれたことにより王系に列したとされる武将メナンドロスの発行に係る銀貨(古代文字資料館所蔵)。メナンドロス(在位、前 155-前 130)は、エウクラティデス(在位、前 171-前 155)の死後、インド・ギリク朝の絶頂期を作り上げた人物であり、また仏教を最初に受け入れたギリシア系の王としても知られている。『ミリンダ王の問い』という書は仏教の経典に準ずるものとして扱われるわけであるが、ここではギリシアのミリンダ王とインドのナーガセーナ尊者の対話が展開されている。対話の主人公であるミリンダ王とはメナンドロス王のことである。

表には、王の胸像の周囲にギリシア文字・ギリシア語が二行書かれている。一行は 9 時の位置より時計回りに貨幣の内側よりみて B A Σ I Λ E Ω Σ (basileōs 王の)、Σ Ω T H P O Σ (sōtēros 救済者の)とある。他の一行は 8 時の位置より反時計回りに貨幣の外側よりみて M E N A N Δ P O Y (menandrou メナンドロスの)とある。全体で“救済者たる王メナンドロスの”と読める。

裏には、神の立像の周囲にカローシュティー文字・インド俗語(ガンダーラ語)が二行書かれている。一行は 3 時の位置より反時計回りに貨幣の内側よりみて maharajasa(大王の)、tratarasa(救済者の)とある。他の一行は 4 時半の位置より時計回りに貨幣の外側よりみて menamdrasa(メナンドロスの)とある。三つの単語に単数属格語尾 asa があり<sup>7</sup>、全体で“救済者たる王メナンドロスの”と読める<sup>8</sup>。



表



裏

<sup>7</sup> Burrow1937 の 22 頁に単数属格語尾として-asa を挙げる。この書は中国トルキスタンのカローシュティー文書を扱ったものであり、本貨幣とは時代も地域も異なるが、これによって貨幣の asa をも属格語尾として大過はないであろう。

<sup>8</sup> 中村 2004 参照。

### 3. インド・スキタイ朝の二言語併用貨幣

その後、紀元前 85 年頃には北方よりイラン系の遊牧民族が侵入し、インド・グreek朝は滅びていくこととなる。インド西北に新たに興ったイラン系のマウエス、アゼス、アジリセスなどの諸王の王国をインド・スキタイ朝と称する。インド・スキタイ朝の諸王はインド・グreek朝のギリシア文化を取り入れたようである<sup>9</sup>。次に紹介する貨幣はアゼス王の発行に係る銀貨(古代文字資料館所蔵)である。

表には、この民族を彷彿とさせる人物の立像の周囲にギリシア文字・ギリシア語が二行書かれている。一行は 7 時の位置より時計回りに貨幣の内側よりみて B A Σ I Λ E Ω Σ (basileōs 王の)、B A Σ I Λ E Ω Σ (basileōn 諸王の)、M E Γ Λ O Y (megalou 偉大な)とある。他の一行は 7 時の位置より反時計回りに貨幣の外側よりみて A Z O Y (azou アゼスの)とある。全体で“諸王の王にして偉大なるアゼスの”と読める。

裏には、女神の立像の周囲にカローシュティー文字・インド俗語(ガンダーラ語)が二行書かれている。一行は 5 時の位置より反時計回りに貨幣の内側よりみて maharajasa (大王の)、rajarajasa (諸王の)、mahatasa (偉大なる)とある。他の一行は 5 時半の位置より時計回りに貨幣の外側よりみて ayasa (アゼスの)とある。全体で“諸王の王にして偉大なるアゼスの”と読める<sup>10</sup>。



表



裏

“諸王の王”という表現がギリシア文字・ギリシア語とカローシュティー文字・インド俗語(ガンダーラ語)の両者に見えるが、これはイラン文化の影響を受けた貨幣にみられる表現形式である。

<sup>9</sup> 田辺 1992 の 57 頁によると“ガンダーラ地方を支配したこれらイラン系の遊牧国家インド・スキタイ朝のマウエス、アゼス、アジリセスなどの諸王はインド・グreek朝のギリシア文化を積極的に取り入れ、コインもインド・グreek朝のコインに準じた銀貨(銅が混入したビロンも含めて)と銅貨を発行した。”とある。なお、本文において遊牧民族の侵入の時期を“紀元前 85 年頃”としたわけであるが、この年代については前田 1992 の 230 頁参照。

<sup>10</sup> 中村 2004 参照。



#### 4. クシャン朝の二言語併用貨幣

その後ヒンドークシュ山脈以北に興った遊牧民クシャン族は山脈以南に進出し、インド西北の地を中心として栄えた。いわゆるクシャン朝である。次に紹介する貨幣はクシャン朝の最盛期を築いた有名なカニシカ王(在位、後 143-後 171)の曾祖父クジュラ・カドフィセス(在位、後 60-後 100)の発行に係る銅貨(古代文字資料館所蔵)である。なお、クシャン朝諸王の在位年は小谷 2003 による。

表には、王の頭像の周囲にギリシア文字・ギリシア語が二行書かれている。一行は 6 時の位置より時計回りに貨幣の内側よりみて[B]A Σ I Λ E Ω Σ (basileōs 王の)、Σ T H P O Σ Σ [V] (stērossu 【不明】)とある。他の一行は 5 時の位置より反時計回りに貨幣の外側よりみて[E P M A I O V] (ヘルマイオスの)とある。[]は Mitchiner2004:597 で補った部分。Σ T H P O Σ Σ [V]の意味するところは不明であるが、おそらくはΣ Ω T H P O Σ (sōtēros 救済者の)と関係のある語なのであろう。田辺 1992:173 はこの銘文を“救済主、ヘルマイオス王の”と読む。なお、ギリシア文字・ギリシア語銘文にみられるヘルマイオスはインド・スキタイ朝の王名である。これはインド・グreek朝最後の王とされるヘルマイオスの貨幣を模倣したものらしい。

裏には、ヘラクレスの立像の周囲にカローシュティー文字・インド俗語(ガンダーラ語)が一行書かれている。8 時の位置より反時計回りに貨幣の外側よりみて kushana(クシャン族)、yavugasa(族長の)、dhra[mathidasa] (法に住みたる(法を堅持したる))<sup>11</sup>、[kujulaka]sasa(クジュラ・カドフィセスの)とある。[]は Mitchiner2004:597 で補った部分。意味するところは、“クシャン族の長、法に住みたる(法を堅持したる)クジュラ・カドフィセスの”ともなるうか。



表



裏

<sup>11</sup> 渡邊 1973:59 は“(仏)法に帰依したる”、Mitchiner1988:597 は“Steadfast in the law”、田辺 1992:174 は“正法の人”とする。おそらく、thida はパーリ語の thita(形容詞)“住立せる、停住の”に相当する語であらう。パーリ語は水野 1994:114 参照。

その後、クシャン朝もカニシカ王の時代になると、二言語併用貨幣は行われず、ギリシア文字・ギリシア語の銘文のみを持つ貨幣や、さらにはギリシア文字でイラン語の系統であるバクトリア語を表記した銘文のみを持つ貨幣が発行されるようになる。

【参考文献（発行年順）】

- Burrow, T. 1937. *The Language of the Kharosthī Documents from Chinese Turkestan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 渡邊 弘 1973. 『西域の古代貨幣』, 学習研究社。
- Michael Mitchiner 1975. *Indo-Greek and Indo-Scythian coinage Volume I. The early Indo-Greek and their antecedents*. London: Hawkins Publications.
- 田辺勝美編 1992. 『[平山コレクション]シルクロードのコイン』, 講談社。
- 前田耕作 1992. 『バクトリア王国の興亡』(レガス文庫), 第三文明社。
- 水野弘元 1994. 『パーリ語辞典〈二訂版〉』春秋社。
- ジョナサン・ウイリアムズ編/湯浅起男訳 1998. 『図説 お金の歴史全書』, 東洋書林。第 1 刷 1998 年, 第 2 刷 2002 年。
- P. L. グプタ著/山崎元一他訳 2001. 『インド貨幣史 一古代から現代まで』刀水書房。
- 小谷仲男 2003. 「クシャン族とガンダーラ仏教」, 『NHK スペシャル文明の道 ②ヘレニズムと仏教』日本放送出版協会, 200-225 頁。
- 中村雅之 2004. 「カローシュティー文字貨幣 3 種」, 『KOTONOHA』第 22 号, 1-3 頁。
- Michael Mitchiner 2004. *Ancient trade and early coinage Volume one*. London: Hawkins Publications.
- 吉池孝一 2011. 「バクトリア王アガトクレスの二言語併用貨幣」, 『KOTONOHA』第 99 号, 18-21 頁。
- 吉池孝一 2014. 「ギリシアとインドの邂逅 一貨幣の形態と製造法について一」, 『KOTONOHA』第 137 号, 9-11 頁。